

佛乗寺檀信徒の皆さまへ

日蓮正宗 佛乗寺 住 職 笠原建道

父母の恩

『四恩抄』 (御書・九二二頁)

仏教の四恩とは、一には父母の恩を報ぜよ、二には国主の恩を報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ、四には三宝の恩を報ぜよ。一に父母の恩を報ぜよとは、父母の赤白二滯和合して我が身となる。母の胎内に宿る事、二百七十日九月の間、三十七度死ぬるほどの苦みあり。生み落とす時、たへがたしと思ひ念ずる息、頂より出づる煙梵天に至る。さて生み落とされて乳をのむ事一百八十余石。三年が間は父母の膝に遊び、人となりて仏教を信ずれば、先づ此の父と母との恩を報ずべし。父の恩の高き事須弥山も猶ひきし。母の恩の深き事大海還って浅し。相構へて父母の恩を報ずべし

【意 訳】

仏教で説く四種類の恩は、一には父母の恩、二には国主の恩、三には一切衆生の恩、四には仏法僧の三宝の恩です。一の父母の恩を理由は、母親の胎内に宿って生まれるまでの二百七十九日、九ヶ月の間、母親は三十七度も死ぬほどの苦しみがありません。また出産の時の苦しみを思うと想像を絶するものがあります。その上、生まれてから飲む母乳は一八〇余石(一説では一升瓶一万八千本)にもなります。三歳になるまでは常に父母の膝の上であって育まれました。この事実の上から、大人になって仏教を信ずるようになったのですから、先ず父母の恩を報ずべきです。父親の恩を山の高さに譬えれば、仏教の中で説かれる最も高い山である須弥山もなお低いのです。母親の恩の深さを海の深さに譬えるならば、大海の海が深いといってもなお浅いのです。このようなことを心に留め、父母の恩を報ずべきです。

訃報

法名 久修院妙花大姉

俗名 宮原アヤ 享年九十九

平成二十八年七月二十一日寂

宮原アヤ様が七月二十一日に逝去されました。宮原さんは毎月の御講やお盆・お彼岸などの行事に車イスで参詣されておりましたので、皆さまもよくご存じのことと思います。

まもなく百歳を迎えるご高齢にもかかわらず、息子さんご夫婦とともに参詣されているお姿に接して、信心の姿勢ばかりか、生き方全般について励まされた方も少なくありません。月に一回とはいえ、車イスを押してお母様の参詣をサポートされる息子さんご夫婦のお姿に、大聖人様が四条金吾に与えられた「実に孝養の詮なり」(御書・六百二十一頁)とのお言葉を思い浮かべた方もいらっしゃるでしょう。

今ごろは、「現世安穩・後生善処(現在では、安らかで穏やかな日々であり、来世には善き処に生まれあわせる)」(法華経薬草喻品第五)と仏様が仰せ下さるように、宮原アヤ様が希望するところに生を受け、新しい生命活動を始められています。

佛乗寺の建て替えに際して、本堂は椅子席で足の御不自由な方にも参詣が容易になるように、という思いをお伝えしたところ、全檀信徒の賛同を得ることができ、今日の佛乗寺本堂があります。したがって、車イスでの御参詣がある度に、住職としては、有り難く思います。

これからますます高齢化が進み、車イスの方が増えてくることと思います。お元気な方は、そのかた方に手を差し伸べてサポートをして頂きたいと思います。宮原さんもそうだったと思いますが、歩行が困難になった方をお寺にお連れするご苦労は、経験したことのある方のみが知ることのできるものです。お寺に無事到着して「やれやれ」というところでしょう。

そのような時に、手をお貸しすることは、次に挙げる、「法華経隨喜功德品第十八」に説かれる修行に励んだこととなります。

「若し講法の処に於て 人を勧めて坐して経を聴かしめん 是の福の因縁をもって 釈梵 轉輪の座を得ん 何に況んや一心に聴き 其の義趣を解説し 説の如く修行せんをや 其の福限るべからず」

【意 訳】

もしまた、法を説く処において、人に勧めて「こちらにお座りなさい」と座っている処を譲って法華経を聞かせるならば、座を勧める貴い行いの因縁により、生まれ変わった時に、帝釈天や大梵天などの天界の大王や、武器を用いず正義だけで正解を統一する轉輪聖王の地位を得るであろう。参詣したり、少し聞くだけでこのような大きな功德があるのだから、一所懸命に仏の教えを聞き、法華経の意義を他人に説き、経文の如くに実践する人の功德ははかりしれない。

少しだけ車イスを押すお手伝いをすると、生まれ変わった時に「帝釈天や大梵天や轉輪聖王」になれるほど功德が具わるのですから、進んでサポートをしようではありませんか。また、サポートを受ける方も、遠慮は無用です。なせならば、このお経文にあるように、車イスを押した方に、「大功德」がそなわるのですから。

宮原さんは、第二次大戦中、空襲被害を避けるための疎開を余儀なくされるまでは、この西荻窪界隈で過ごされたそうです。後に息子さんの愛三郎さんが杉並に居を構えられたのを機に、再び杉並に住されることになり、お寺への行き帰り、車の車窓から見える風景に、若かりしころを述懐されていた、と伺いました。

その当時は佛乗寺はありませんでしたが、因果の教えからすれば、過去世での因のなせるものでしょう。

言うまでもなく、因がよき結果となって現れたのは、息子さんや奥さんのご信心によるところ大です。善き縁を持つことの大切さを宮原さん親子が教えて下さっております。

私たち佛乗寺の檀信徒は、御本尊様という最高最大の縁に触れております。したがって、過去世のさまざまな行いの上に積んだ「善悪の因」は、最高最大の善縁によって、すべて「善の結果」として受けることができます。

もし、皆様の中に、「善の結果」が出ないではないか、と少しの疑いあるならば、今一度、御本尊様の前に坐って、御題目を唱えましょう。そして「御本尊様、大聖人様、私は少しも

善の結果がないと疑っているのですが、この疑いを晴らして下さい」と心から祈ろうではありませんか。

必ず疑いを晴らして下さいます。真剣に、心の底から御本尊様を信じるならば、功德は間違いありません。ただし、一分や二分では足りません。十回や二十回ではまだまだです。ご自身の境界でそれぞれに違いがあります。その中での「つよき心から」の唱題であり御祈念が肝心です。

九十九歳までお元気で、この三月まではお寺の御本尊様の前に、「信心の歩みを運ぶことが叶った」宮原アヤ様の、来世でのご活躍をお祈り申し上げます。

冒頭の『四恩抄』で、父母の恩の大きさを教えて下さいます。その恩に報いるために、私たちは仏道修行に励んでいることを忘れてはなりません。恩ある父母の現世と来世を助けることができるのは『法華経』であり、なかんずく末法にあっては『南無妙法蓮華経』の御題目であることは、各お経文に明示されるところです。

末法の御本仏日蓮大聖人様が私たちのために教えて下さった、三大秘法の御題目を唱え、孝養に励みましょう。